

●維新精神史研究

徳重浅吉著

この書は大谷大學教授徳重浅吉氏が大學卒業以來最近十年間に諸雜誌の上に發表せられたことのある明治維新史關係の論文二十編を補訂し、その内容の相關聯するところに従つて編次せられしもの、まづ日本國道學の成立に於て維新史の意義を日本我的發見、自覺にあるとする著者の總論的立場を定め(第二章)ついで幕末政治の特殊形態と武士階級の窮乏の事實を稽へ(第三章、四章)、その基礎の上に王政復古の思想的背景を概観し(第七章)、轉じて諸の志士の立場と精神とを明かにし(第九—十二章)、然る後維新改革の指導精神を吟味し、神佛分離の問題よりひいて廣く、維新草創期に於ける教學の問題に及び(第十三—十八章)、最後に明治文化の特質、日本精神の意義、本領・指針の二章を以て全體の結論に擬してゐる。

今通讀に際して心付いた二三の點を擧げて著者の史風の一斑を窺ふならば、第一に著者が精神史の對象となるものを單に時代の思想信仰等に限らずして廣く一般歴史事象の上にまで及ぼし、その複雑なる推移の中に時代精神の動向を把握しようとする事が擧げられる。換言すれば著者の以て精神史となす所のものはその内容に於て何等かの特殊のものを有するのではなくしてむしろより多く一般史に近いものを有つてゐることであるそれは若干の體系づけられた思想を選んでそれら相互の關聯發展の跡を跡づけようとするものでもなく、さればとてまた社會の構造としてその思想の性格との間に一つの必然的な相關關

係を見出して、それを或る一般的な形にまで形式化しようとするものでもない。この後の點に就いて更に言ふならば著者の關心は社會的なものよりもより多く個人的なものに向けられてゐるやうに思はれる。然もその個人は必ずしも維新史上の大きいなる名前にはのみ限るのではなくしてあらゆる人々に平等に向けられてゐるのである。勿論著者の志士に對する大いなる敬愛の情は行文の間に自ら汲みとられるものがあるが著者はそれを決して偶像的な英雄崇拜にまで陥らしめしことなく、あくまで彼等の本領とその精神とを正しく領得することを期してゐる。而してそれが爲には著者は決して流布の資料にとゞまらず、自ら困苦して諸種の資料を蒐集し、あらゆる零細なるもの、上にもなほその意味を認めて自己の所論に寄與せしめてゐるのである。就中明治初年の教學關係の諸編は殊に著者蒐集の新資料に俟つところ多く、讀者はそれによつて新に教へられるところが多いこの書が決して時を見はからつての著でない所以もまたそこにあるわけである。筆者はこの機に於て片々たる時流に動かされることなく、終始塗らざる誠實さを以て學んで倦まないところの著者に深甚の敬意を表したいと思ふ。(菊列七九六頁、立命館出版部發行、定價六・〇〇)(柴田)

●新聞叢書

明治文化研究會編輯

近時國史に對する反省が所謂専門家のみならず、一般に深まりつ、ある状態に應じて、研究論議の發表以外に史料原典の出版が續々行はれつ、あるのは誠に望まじき事である。最近明治

文化研究會の同人諸氏によつて編輯公刊された「新聞叢叢」もその一である。

徳川時代の末葉、幕府の新學研究所たる開成所の教授等には後明治初期に活躍せる洋學者を網羅してゐた。柳河春三、加藤弘之、箕作麟祥、箕作奎吾、外山正一らは皆その一員である。彼等は職務として外國新聞の翻譯をなし當局の參考に供してゐたが、幕末維新といふ政治的社會的大變革の時代に際して、外國文化の洗禮を早くより蒙り、これが受容攝取に熱烈な關心を抱くに至り、所謂新聞雜誌なる機關に興味を感じて來たのは當然である。その結果此等時代の先覺者達は會譯社(局)と稱する團體を作り、翻譯の草案を主として筆寫の回覽雜誌を始め、更にそれに満足せずして、慶應三年には「西洋雜誌」を、同四年には「中外新聞」を公刊して我國新聞雜誌の濫觴をなした。

同時に會譯社の同人等は時代の一中心地江戸にあつて、職務上幕府の機務に通ずる事が早く、その得たる種々な報道を蒐集記録したのが即ちこの「新聞叢叢」である。従つて本書の内容が如何に價値あるものであるかは容易に想像せられる所であるが、一には敗者側の幕府の記録であつた爲に、多く世に知られる機会なくして過ぎたのである。然るに近年柳河春三と親交ありし會譯社同人の一人渡邊一郎の遺族の手に保存されてあるのが發見され、こゝに上梓されるに至つたのである。

今その内容をみるに第一巻は慶應元年十月に始まり第二巻は同二年八月に始まり、明治維新直前の最も多事多難な時代を描

き出してゐる。言ふ迄もなく當時幕府最大の事業は長州征伐である。同時に又過去何年か纏れに纏れて、最早や幕府一個の獨裁を以てしては處理し得ぬ様になつた外交問題である。故にこの頃の新聞叢叢は殆ど長州征伐關係の記事を以て埋められてゐる。家茂將軍は京畿に滞留、一橋慶喜も亦京阪の間に活動し、しかも猶幕軍日々に不利なる形勢にあり、長軍が益々勢を得て來た事、その間にあつて英國は薩長に近づくかんとし、英の競争國である佛は全權レオンロツシュらの活躍によつて、幕府側を積極的に援助せんとしつゝ、あつた事などを物語るべき多くの情報が集められてゐる。更にまたパリからの通信もあり、京畿地方出張中の回條からの通報、即ち京師探索書、京師新報、京師風説等がそのまゝ録されてゐる。敵味方を問はず撤文、張紙、御觸の類があるかと思ふと、作州播州の百姓一揆の記事があり、種々雑多な報道がほぼ年序を追ふて列んでゐる。

第三巻は戊辰新聞叢叢といふ外題の下に、鳥羽伏見戦争前後の急速した形勢が同じく種々なる立場色々な角度から眺められたまゝ、雜然と記録されてゐる。

第四巻は「會議之記」と題し、鳥羽伏見に敗退した慶喜が江戸に引揚げ、東征軍進發の事も近づいた時、これに對して如何なる方策に出づ可きや、佐幕側の諸藩士が開成所に集つて各々忌憚なき意見を呈出した際の記録である。始めに「妄に他見を許さず」と斷つてあり、その内容は東征軍に對し或は攻撃を主張し或は防禦を唱へ、いづれも率直に所信を披瀝して頗る興味あ

るものがある。

更に本書の末尾には神田孝平の「會議法則案」、加藤弘藏の「會議法の思按」が添へられてゐる。

在來の明治維新に對する一般の理解は、多く薩長側の史料を典拠としてなされ、それによつて構成された解釋は現在既に宗教的信念に迄昂められてゐる様に思はれる。この際時の敗者幕府側の遺せる史料「新聞叢叢」が公刊された事は、人々をかゝる誤謬から救つて正鵠を得た維新史理解に導く資となるであらう勿論此書は幕府側のみの一貫した主張、見識を表現するものではなく、各方面の雜多な報道の集積であり、歴史の素材の併列である。しかし本書の持つかゝる性質自身に於て、我々はその歴史の意味を見出す事が出来る。柳河春三は序文に於て大略次の如き本書編述の趣旨を記してゐる。

會譯局同僚は新聞報告の類を得る事常に多い。しかし時には數日相遇不事なく見聞を缺く憾もある。夫故此の一冊を局中に備へて各人新聞を得る毎にこれに書加へ、訛傳浮説たりとも敢て拒絶せず以後來の話柄となさんと云つてゐる。而して更にこれが閱覽を希望する者には、會譯局同僚に限らず何人にてても此局内に於て借覽、謄寫する事を許してゐる。但し既述の如く第四卷會議之記のみは例外であつて一般には公開されなかつた。さて本書のかゝる趣旨は、時代が既に各人に廣く多方面な智識見聞を持つ事を要求してゐたのに合せ考ふ可きである。急激なる推移、切迫せる變革に處して行くには所謂新聞なるもの、

機能、少くともそれに似たものを用ひねばならなくなつてゐたのである。

それは一面西洋から輸入の新聞雜誌に關する新智識による事勿論である。しかし同時にそれは現代新聞の性質に當嵌まる程發達したものでない事も勿論である。

近世社會の所産である「新聞」は、一定の政治社會現象を一定の政治的社會的立場から表現し報道する機關である。即ちある國家内、ある社會内の對立意識の表現であるといへる。嚴正中立の立場といふ如きは、新聞にとつてあり得ぬ事であるし、同時にまた決して新聞存在の意義のある所でもない。一の事實に對して新聞は夫々の角度から把握し、新聞的感覺によつて批判し再生産して表現する。「社會の木鐸」といふ「新聞」の同意語は實はかゝる點に於て言はれるものである。

かくて新聞は自己の主張、自己の立場、換言すれば夫々の新聞意識を持たねばならぬ。明治時代の前半日本の新社會興隆期にあつては、新聞は強い新聞意識を持ち、新日本の内部に強い對立と躍進があつた事を物語つてゐる。それは現代に於ける如く、あらゆる新聞が新聞感覺を失ひ、新聞意識を捨て、萬人共通興味本位の間物に墮しつゝ、あるのとは香煙の相違であつた。

「新聞叢叢」は適確に斯かる意味に於ける新聞意識を有するものでは無い。幕府側を官軍と言ひ、薩長側を賊軍と記してはゐても、更に進んだ意味に於て會譯社同人が對立意識をはつきり

自覺してゐたかは疑問である。或はその點で却つて歴史の素材としては、そのまゝ取り入れ得るかも知れないが、しかし兎に角本書全體を通讀し、又その編纂の趣意を考へる時、我々が當時の幕府側の立場、少くとも會譯社同人の見識を、歴史的に理解する事は可能であらう。(菊判)四六一頁、岩波書店發行、定價五圓(時野谷)

●初島の經濟地理に關する研究

内田寬 一著

近來地理學に於て地誌の研究が盛行してゐるが、地域が一つの明確なる單元をなす事は地誌を書くに最も都合のよい處で、海洋によつて孤立してゐる島に關する研究が續々と發表されて來た。本書も亦その一つで、初島は熱海の海上三里相模灘の一隅にあつて周回一里足らず戸數四十一戸耕地十五町歩餘と云ふ眞に蕪蕪たる一小島である。しかし從來共產村落である等と云はれ一般の注目する處であつたが之に就いて堂々二百四十頁に達する大冊を物せられた著者の努力には先づ敬意を表すべきであらう。しかも之は初島に關するすべての地理上の問題を取扱つたのではなく、文祿の檢地帳、貞享の初島村鏡等と今日の狀態との比較により初島の耕地と戸口との關係を主とし水産を副とする歴史地理的研究であり、微に入り細を穿つたものでその所論は地理學者は勿論の事史學者殊に經濟史家の顧みるべき多くのものを含んでゐる。以下内容を簡単に紹介せんに、記述は先づ初島の戸口の増減に始る。地形地質氣候と云つた一般地誌

の型を破つてゐるのは注意すべき事である。戸口は從來信ぜられた如く不變ではなく文祿四年には二十八戸で天保以來は今日の戸數に増加したもので人口も天和より寛政頃の二百十餘人が昭和七年三二〇人となり一戸當人口も昔の五人より現今の七人に増加した事が明かにされた。徳川時代に於ける人口停滞の原因としては出婚が多かつた事、産屋の存在が間曳の弊風を助長したであらう事、青年組による女子接近の困難等を史料と該博なる民俗學的知識を援用して述べその根本的原因は之を經濟生活の逼迫に求むべきであるとし、かくて耕地の分析に入り耕地は從來畑地のみで文祿以來段別の變動が少く、又品等は上中下三階次に分たれ上畑が四五%を占め品等が高い事又宅地は一階次でその石盛は九斗五升に達し畑は各八、七、六斗で何れも他地方に比して石盛が大である而も耕地と戸口との關係は現在一戸當三反代が五〇%以上であり之も亦他地方に比し狭少であつて人口増殖の困難なる事を明らかにし尙文祿以來の變化は各戸の持分が平等化してきてゐる點で全國の趨勢と反對である。又耕地は文祿以後約二倍にも細分されて來たが之は比較的廣い畑を分割して狭い畑を作つたからでありそれば分家に基くものであらう。更に之を畑の品等から見れば上畑の廣いものが分割された事を示してゐる。品等の分布は聚落に近く、傾斜の緩い北部が上畑、南部が下畑中部が中畑である事を示してあるが今少しく詳細な自然地理的説明を望む人もあらう。聚落は島の北部にあり海岸と臺地との中間數段の段丘上に集村をなしてゐる。宅